

「逃げろ！」薬物は人間を化け物にする

みんなの保健室 陽だまり 服部満生子

究極の「でんぐり」だ、内谷さんの勇気と度胸に度肝を抜かれた。

苦痛には身体的・精神的・社会的等々あるが、生きること、生活全てまると、どん底状態、それも家族全員が。これほどまでの苦しい体験は他にあるのだろうかと思える。

内谷一家の普通の家族写真、それぞれが笑っている。

何でもないような家族に何が起きたのだろうか。暴走族だった。薬物依存症だった。一つ一つはありふれた問題ともいえるが、弟までが覚せい剤依存症になり、壊れていく家族・・・それぞれの痛みや苦しみを想像するとぞっとする。

普通の家族が、どうしてこれほどまで底の見えない真っ暗闇に巻き込まれていくのだろう。逆を言えば誰もが同じようになる危険性が身近なところにあるということであろうか。

内谷さんは言う「自分のため、自分が再び戻らないために一人芝居をやり、恐ろしさを伝えている」と。

身を守るために①恥をかく勇気(話せる友人を持て)②逃げる勇気③夢を持つ勇気が必要。話せばわかる、断るなんてことは通じない「逃げろ！」薬物は人間を化け物にする。回復するが治らない、僕の脳は委縮している。言葉に迫力があり説得力があった。

親(母親)と子は「共依存症」という病気。依存症とは人間と人間の間にも生まれる「希薄」から生じる。訪ねたダルクで「この息子さんの生活は、私たちが面倒みるから、捨てて帰ってください」と言われた。

精神病院に入院させたが病院ではより強い薬を使用し、ドロドロの人間をつくっていった。このままだとだめになると思い弟を連れてかえって生活した。しかし抜け出せなかった、ここでも「医療の限界」を思い知らされる。

昨日の新聞に、青梅市の身体障害者支援施設で身体拘束された入所者(28歳)が死亡した。司法解剖したが死の特定には至らなかった。今後病理検査で死因の特定を進めると報道があった。

死因は明らかです「自由を奪われた」からです。内谷さんが語る「精神科のより強い薬で抑制しようとする、新たな薬物中毒をつくる」と一緒です。動くから押さえつける。これは内臓も筋肉も自由を奪われ血液の循環が悪くなる。これが医療なのでしょう。司法解剖とは何を見るのでしょうか。

とはいえ、私も急性期病院で働いていました。古い話ですが小児専門病院での摂食障害の女兒、入院治療し体重増加、学校にも通学ができるようになり退院になるのですが、数か月すると同じような状態となり再入院となるのでした。カンファレンスで「母親と離す必要が

ある」と対応策は出て、児童相談所と相談まで進むのですが、子どもの権利条約や虐待防止法など法律に阻まれ、具体的には進められなかった苦い体験を持っています。

内谷さんが最後に語った「今は、処方薬・市販薬の依存症が増えている。オーバードーズ（過剰投与）も問題です」が強く印象に残っています。